

アトリエ 琉游舎 だより 225号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2026年2月25日発行

彼岸会・涅槃会法要 3月20日（金）10時半から

- 今年も琉游舎では春の彼岸会法要を行います。彼岸会は亡くなられた方を供養し墓参りをして先祖を偲ぶ日と思われませんが、私の考える彼岸は死後の世界ではなく、この日々の中で自分なりの安らぎの処（彼岸）を思いそこに安らぎの処を見いだすことです。そして私のいのちが永遠のいのちとしてあること、それを繋いでくれてきた生きとし生けるものに感謝する日です。今年も同時に涅槃会の法要も行います。涅槃会はお釈迦様の命日に行う法要です。
- 彼岸会は春分の日（3月20日）に行う法要ですが、お釈迦様の命日が新暦の4月2日にあたるため、今年も二つの法要を同時に行うことに致しました。お釈迦様の命日は旧暦の2月15日とされています。歴史的事実として正しい日かどうかは分かりませんが、昔からの言い伝えです。
- 2つの法要は儀式の内容も違います。わたしの宗派、日蓮宗が定めた「宗定日蓮宗法要式」の教科書通りに行うと差定（式次第）が異なることにはなりますが、わたくしは今回同時に行う意味を考えて、わたしなりに考えた差定で法要を行いたいと思います。
- 法華経は全ての生きとし生けるものが仏となることができると教えます。その教えを唱え実践した方がお釈迦様です。お釈迦様が今につながる永遠のいのちの始まりです。お釈迦様の死によって始まった、永遠のいのちを繋いで、受け取り、その先に繋げていくことが、仏様と共に毎日を生きるということです。3月20日はその毎日を立ち止まってゆっくり省みる日になればと思います。そんな思いを込めて行う彼岸会・涅槃会法要に是非お越し下さい。
- 琉游舎の活動は営利事業ではありません。お布施や供物は一切お構いなきようよろしくお願い申し上げます。琉游舎は宗教宗派を問わない、すべての方のための開かれた「場」です。

写経会 3月1日（日）13時半から

読書会を再開します テキストは「選択本願念仏集」です。
3/10・3/31日（火）13時半から

私は「カミとホトケの出会いを5回に渡り考察していくなかで「自然そのものが私たちのカミ」であると言う結論に至りました。恐らくこの考えに疑問のある方や、立証して欲しいと考える方もおられると思います。私のこの考えは、今までの学術的成果と論理的な思考の末に得られた結論ではありません。私のこれまでの実体験の中から得られたものです。それはこの地で育った18歳までの、何の発見も感慨もなかった自然と生活への無関心だった時。40年間の都会生活での自然と生活が無関係だった時。そしてこの十年間の自然をありのままに観る時。この三つの時を過したからこそその「自然そのものがカミ」であるとの発見です。自然の厄介さ、恵み、多様性、何よりも自然の不変再生を実感しなければ、仏教の実践思想「中道」を全く理解できないままだったでしょう。そして西洋思想の基礎原理「イデア」の絶対性がなぜ理解できなかったかの理由も分らないままだったでしょう。私のホトケとの出会いが自然へカミへと再帰させてくれたのです。

私とホトケの出会いは私が世の中を生きるあり方を変えました。それをありのままに観てありのままに生きると言う言葉で私は表現してきました。これを仏教用語で言うと、ありのままに観るは「空観」あるいは「中観」と呼ばれるもので、一切は縁起の法則により「空」と観る世界把握です。空観は私たちにあるままに生きることを要請します。それが「中道」を生きることです。「有と無」、「常と断」、「善と悪」、「快と苦」などの二項対立の世界把握で生きるのではなく、どちらにも偏らない実践の道（生き方）を「中道」とお釈迦様は呼びました。ありのままに観る＝中観は「智慧」、ありのままに生きる＝中道は「実践」です。お釈迦様の智慧を信じ、お釈迦様の実践を行うこと、それこそが私の仏様であり私の信行の道です。

中観は「正と反」の二項を措定しないことでありのままの道（中道）を観じ、理解することです。中道はその生き方の実践です。お釈迦さまはその生き方の実践方法として八つの正しい道（八正道）を示されました。中道を歩むための正しい生活態度です。**1, 正見**：物事をありのままに正しく見ること、正しい見解を持つこと。**2, 正思惟**：自己中心的ではない、正しい考え方をすること。**3, 正語**：真実を話し、人を傷つけない正しい言葉を使うこと。**4, 正業**：貪瞋痴の三毒を離れ、善い行動をとること、正しい行いをする事。**5, 正命**：正しい手段で生計を立て、清らかな生活を送ること。**6, 正精進**：善い行いを努力し、実践し続けること、正しく努力すること。**7, 正念**：心を安定させ、真理を忘れない、心の安定した状態を保つこと。**8, 正定**：正しい精神統一をすることで心を安定させ、動揺のない迷いのない境地に入ること。

これらがお釈迦様の示した中道を歩むための八つの実践態度です。一見、私たちの日常の道德規範、倫理規範に見えます。社会生活のための当たり前の態度ともいえます。しかし簡単そうに見えるこれら八つの道を実践するとなれば、とても困難であることもすぐ見て取れると思います。なぜならば、私たちは「正」に対して「誤」が、「正」がもたらす結果の「善」に対して「悪」が対峙される論理の社会に生きているからです。世界を二項対立で判断する思考回路です。これはお釈迦さまの考える「正」ではありません。「正」でも「誤」でもない、「善」でも「悪」でもない、どちらにも偏らないありのままに観ることが、お釈迦様の語る「正」です。これが「中観」「中道」です。しかし世界では異なる考えに対して、屁理屈とも思える「正」を標榜することで対立を招く、自己正当化の論理と実践に溢れています。このことは世界を見ればすぐに理解できることではないでしょうか。本来「正しい道」の実践が「善」へと導かれなければならないのに、最終的に導かれるところは、「正しさ」とは正反対の結果です。「正」が「正義」となり、「益」や「利」の争奪から「対立」「闘争」「迫害」や「差別」「格差」へと辿り着いてしまう皮肉は、「正」を語る人々の中に「悪」が措定されてしまっているからです。「悪」を前提としなければ「善」を語れない考え方は、「絶対善」の存在から「善」の履行と「悪」の駆逐を委託されているとの考えを採らなければできないことでしょう。仏教には「絶対」はありません。故に絶対善も絶対悪もありません。あるのは「ありのまま」です。「善悪一如」「善悪不二」です。絶対善を絶対者から委託された人々は、絶対者の意志の履行の名の下「正義」を躊躇なく履行できるのです。それは履行するものの意志ではなく絶対者の意志だからです。お釈迦様の「正」を実践しようとする私たちには「絶対」と名付けられるものがないだけではなく、誰からも何も委託をされていません。私自身の目で観て、自身の心と頭で信じ、自身の足で歩むのです。それは私たちの自由意志です。私たちにとっての絶対があるとすれば、お釈迦様が教えてくれた中観（智慧）と中道（実践）を信じることだけです。絶対に向かって実践をするのではなく、ありのままに観たものが差し示すところを、ありのままに（八正道のままに）歩むだけです。歩む足も私の足、道を観る眼も私の眼、私たちは絶対善と呼ばれるものに向かって歩むのではなく、ありのままに歩んだところがお釈迦様の教えてくれた「善」、その歩み自体が「善」であると信じて生きることが、中観の智慧で中道を生きることです。

自然そのものが私たちのカミであるとの結論は、立証は不可能です。それは縁起の法則を信じるが故の結論だからです。絶対真理の「イデア」に向かって立証し論理整合性があればそれを「真」と認められる生き方を、お釈迦様の徒はとらないからです。私がカミとホトケの出会いを体感したとき、「中観」「中道」を一瞬にして悟り「イデア」の理解が不必要だと知ったことは、お釈迦様への「信」がなせるものなのです。

（閑話休題）中道の言葉は、昨今政治用語として使われています。私の「中道」理解と全く異なることは歴然です。左と右の道を措定して、その中間の道を取るという政治姿勢は、二項対立を前提とする立場であることは明らかです。借り物の概念は、イデア（絶対真）に基づく理解と実践が難しいことと同じですね。